

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

▶ 日本語他動詞における有意性と無意性の問題—日中語対照研究の視点から

doi:10.29714/TKJJ.200106.0019

淡江日本論叢, (10), 2001

作者/Author：鍾慈馨

頁數/Page：395-406

出版日期/Publication Date：2001/06

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.200106.0019>



DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



日本語他動詞における有意性と無意性の問題

—日中語対照研究の視点から—

淡江大学講師

鍾慈馨

【論文要旨】

本稿は、日本語の人間が主語となる他動詞文に限って、述語動詞の意志性と無意志性の問題を取り上げ、中国語話者が、動詞が意志性、無意志性のいずれにも用いられる他動詞文に困難を感じたり、なじまないとする原因を明らかにし、中国語話者の動作、行為に対する認識に言及した。

キーワード：日中対照、他動詞、意志性、無意志性、中国語話者の認識

本稿では、他動詞文における動詞の有意性と無意性及び、表現上の焦点の問題を論ずる。ここでは、特に人間が主語になる文だけを取り上げる。それは人間が主語である表現に限って、動作、行為に意志が含まれるかないかを論じることができるからである。

本章で考察の対象となる他動詞文の動詞と名詞項の組み合わせは次のようである。

他動表現：人間（主語）＋（目的語）＋他動詞

また、本章が考察の対象とする日本語の他動表現における動詞は、主体の意志が入っているかないかに視点を置いて、次のように分類する。

一．動詞の分類

A. 主語である人間が動作・行為を行う意志が入っている文（以下、有意文と称す）に使われる動詞、C. 動作・行為を行う意志が入っていない文（以下、無意文と称す）に使われる動詞、そして、B. 有意文と無意文両方の文に使われる動詞の三種類に分けられる。そして、B. 類の動詞文にも、B 1.、B 2. のような有意文、無意文の二種類に分けることができる。

他 動 詞	A. 類動詞	有意文 (○) (注 1)	
	B. 類動詞	有意・ 無意文	B 1. 有意文 (○)
			B 2. 無意文 (△) (注 2)
			① 目的語が実際動作行為を行なう有生 物である文 ② 生理現象或いは心理現象の文 ③ その他の無意志文
	C. 類動詞	無意文 (○)	

例を挙げると次のようになる。

A. 類動詞：有意文のみに使われる動詞

信じる、祈る、教える、答える、探す、建てる、騙す、勧める、連れる、願う、捨てる ……。

○あの母親は息子の無実を信じる。

○全国民は神様に平和が再び訪れるように祈った。

○次の電車は2分後到着すると駅員さんが教えてくれました。

○あの人は先から部屋中眼鏡を捜している。

○母はお客さんにお菓子を勧めた。

B. 類動詞：有意文・無意文両方に使われる動詞

逃がす、流す、痛める、折る、浮かべる、落とす、おこす、ぶつける ……。

B 1. (意志が入っている場合)

○バツタを捕まえたが、元気が無くなったので、逃がした。

○男の子は手紙を瓶の中に入れて、海に流した。

○石鹸を使って、手の汚れを落とす。

○あなたのお言葉をたびたび胸に浮かべて頑張っている。

○子供は色紙を飛行機の形に折っている。

B 2. (意志が入っていない場合)

△しばらく追いかけたが、泥棒をとうとう逃がしてしまった。

△外を一回りして帰ってきたら、全身から汗を流していた。

△財布を落としたよ。(財布が落ちたのを見て)

△夜が更けても、子供が帰ってこないで、母親は顔に心配の色を浮かべた。

△山でスキーをしていて足の骨を折った。

C. 類動詞：無意文のみに使われる動詞

失う、恐れる、感じる、驚く、怒る、間違える、忘れる、喜ぶ ……。

○計算を間違えた。

○この新しい計画を喜ばないものはいないだろう。

○今朝はいつもより寒さをつよく感じた。

○ちょっとしたミスで入賞のチャンスを失った。

○友人との約束を忘れた。

以上の例から、次のようなことが分かる。

1. A. 類及びB. 類の中のB 1. 例文の動詞が表わしている動作・行為は、意志性が強い、しかも、主語である人間の意志でコントロールできること。(context、situation などにより無意志性の加わる場合を除く)
2. C. 類とB. 類の中のB 2. の例文の動詞が表わしている動作・行為は一般的にその主体である人間の意志でコントロールできないこと。(context、situation などにより意志性の加わる場合を除く)
3. B. 類動詞は意志性B 1. と無意志性B 2. の二種類の表現が可能であること。

二. 中国語を母語とする学習者が見るB. 類動詞

B. 類動詞は、意志性と無意志性の二種類の表現が可能であることは前に並べた例文で分かる。A. 類の単純に有意性を表わす動詞とC. 類の単純に無意性を表わす動詞に対し、B. 類動詞は中国語を母語とする学習者には、常に有意性を表わす動詞として扱い、context、situation などにより無意志性を加えない限り、無意動詞として使いにくいのである。B類動詞文においての無意志表現のメカニズムを明らかにするために、B 1. の有意文を除き、B 2. の無意文を次のように観察していく。

1. B 2. の無意文

中国語では、B. 類の動詞文において、意志が入っていないようなB 2. 無意文の表現は動作・行為の主体が実際目的語であるようなものは、中国語で目的語が主語の位置に立つ自動詞文として表現するが、動作・行為をする主語が行動意志が入っていないようなものは、中国語で無意志の他動詞文や目的語が動作主体になる自動詞文で表現される。B 1. の有意文と区別して表現するので、中国語を母語とする学習者にはB 2. のような無意文はなじまないものである。

B 2. の無意文において、目的語の違い、或いは実際に行動をする動作主体の違いにより、B 2. の無意文を次の①②③三種類に分けることができる。

①目的語が実際動作行為を行う有生物である文

△しばらく追いかけたが、泥棒をとうとう逃がしてしまった。

△あの子は小学生のころ、戦争で親友を亡くした。

上の文はいずれも、実際に主語である人間が行う動作・行為ではなく、目的語であるものの自らが行った動作・行為である。主語と目的語の間にある種の領属関係或いは利害関係があるため、その目的語の動作・行為によって、主語が目的語に動作・行為を行うことになるのである。

②生理現象或いは心理現象の文（注 3）

△熱／血／涙／汗を出す。

△額に青筋を立てる。

△頭を痛める。

△腹痛を起こす。

△お腹を壊す。

△目を覚ます。

△頭を悩ます。

△目を輝かす。

△心を痛める。(注 4)

上の文はいずれも、主語である人間が自らの体や感情におきた生理や心理現象で、主語である人間がそれを意志的に抑えたり、おこしたりするのは無理である。主語であるものは、意志的に行動をするのではなく、その生理現象や心理現象の発生によって、主語が目的語に動作・行為を行うことになるわけである。したがって、学習者は他の意志文と区別して見ている。

③その他の無意志文

△財布を落としたよ。(財布が落ちるのを見て)

△夜が更けても子供が帰ってこないの、母親は顔に心配の色を浮かべた。

△山でスキーをしていて、足の骨を折った。

△物干し竿に頭をぶつけて、転んだ。

△昨夜、外でのどをひやして、声が出なくなる。

△田中さんは高速道路で、交通事故をおこし、大怪我をした。

△昨日、兄は引越して腰を痛めて、今でも立ち上がれない状態です。

上の文は主語である人間によって、おこした動作・行為であるが、いずれも意図的に行動をおこすものではない。

前に並べたB 2. の無意文は主語である人間が意志的に行動するようなものではないゆえ、同じような事柄を表現すると、中国語を母語とする学習者には自動詞文や無意志の他動詞文で、意志性の入っている他動詞文と区別して表現するものである。

三. 論理上の前後関係

中国語話者が日本語におけるこのような事態・状況を表現する際、意識の上で他動詞文における有意性と無意性の問題をどのように認識するかを明らかにするため、次のような手順で分析していく。

まず、A. B. C. の表現には、論理的に次のような二つの前後関係が考えられる。

- I 主語であるものがまず動作・行為を行うのにしたがって、目的語であるものがある状態になる。或いは、

II 目的語であるものには、ある動作・作用が発生して、その結果として、主語であるものが、目的語であるものにその動作・作用を及ぼしたことになる。

上述のような前後関係をみるため、A. B. C. 類の動詞文を I 主語の観点と、II 目的語の観点の二つから、作例してみた。I は○△の文の主体が動作・行為を行う他動詞文で、II は○△の文の目的語を主語とした自動表現文或いは受け身表現（注 5）である。

A. 類動詞：有意文のみに使われる動詞

○あの母親は息子の無実を信じる。

I （母親は息子を信じる。）

II （息子が信じられる。）

○全国民は神様に平和が再び訪れるように祈った。

I （全国民が平和を祈った。）

II （平和が祈られた。）

○次の電車は二分後到着すると駅員さんが教えてくれました。

I （駅員が到着時刻を教える。）

II （到着時刻が教えられる。）

○あの人は先から部屋中眼鏡を捜している。

I （あの人が眼鏡を捜す。）

II （眼鏡が捜される。）

○母はお客さんにお菓子を勧めた。

I （母がお菓子を勧める。）

II （お菓子が勧められる。）

B. 類動詞：有意文・無意文両方に使われる動詞

B 1. （意志が入っている場合）

○バットを捕まえたが、元気が無くなったので、逃がした。

I （私がバットを逃がした。） （有意志）

II （バットが逃げた。）

○男の子は手紙を瓶の中に入れて、海に流した。

I （男の子が瓶を海に流す。） （有意志）

II （瓶が海に流れる。）

○石鹸を使って、手の汚れを落とす。

I (私が手の汚れを落とす。) (有意志)

II (手の汚れが落ちる。)

○あなたのお言葉をたびたび胸に浮かべて頑張っている。

I (私がお言葉を胸に浮かべる。) (有意志)

II (お言葉が胸に浮かぶ。)

○子供は色紙を飛行機の形に折っている。

I (子供が色紙を折る。) (有意志)

II (色紙が折れる。)

B 2. (意志が入っていない場合)

△しばらく追いかけたが、泥棒をとうとう逃がしてしまった。

I (私が泥棒を逃がす。) (無意志)

II (泥棒が逃げる。)

△外を一回りして帰ってきたら、全身から汗を流していた。

I (私が汗を流す。) (無意志)

II (汗が流れる。)

△財布を落としたよ。(財布が落ちたのを見て)

I (あなたが財布を落とす。) (無意志)

II (財布が落ちる。)

△夜が更けても、子供が帰ってこないで、母親は顔に心配の色を浮かべた。

I (母親が顔に心配の色を浮かべる。) (無意志)

II (心配の色が顔に浮かぶ。)

△山でスキーをしていて足の骨を折った。

I (あの人が足の骨を折る。) (無意志)

II (足の骨が折れる。)

C. 類動詞：無意文のみに使われる動詞

○計算を間違えた。

I (私が計算を間違える。)

II (計算が間違う。)

○この新しい計画を喜ばないものはいないだろう。

I (みんながこの計画を喜ぶ。)

II (この計画が喜ばれる。)

○今朝はいつもより寒さをつよく感じた。

I (私が寒さを感じる。)

II (寒さが感じられる。)

○ちょっとしたミスで入賞のチャンスを失った。

I (私がチャンスを失う。)

II (チャンスが失われる。)

○友人との約束を忘れた。

I (私が約束を忘れる。)

II (約束が忘れられる。)

A. B. C. 類の動詞の○文における論理上の前後関係は、I → II であり、I の文における主語がまず、動作・行為或いは作用・変化を行い、それをうけて、II の文における○文の目的語が主語として、動作・行為などをおこない、しかるべき状態になったということになる。

○文に対して、B 2. の△文は、始めに主語が動作・行為を行うのではなく、目的語そのものにある動作・行為或いは状態が発生し、主語と目的語の間には、ある種の領属関係や利害関係があるため、その目的語の動作・行為或いは作用・変化によって、主語が目的語に動作・行為を行うようになるのである。したがって、B 2. の△文における論理上の前後関係は、II → I である。

四. 中国語話者に見られる使用傾向

中国語話者にとって、B. 類のB 2. の△文はなじまない。

1. B 2. の△他動詞文

B 2. の△他動詞文は、中国語話者にとって、主体の意志性動作・行為と認識されるために、それを無意志性動作・行為とする場合、つまり、目的語であるものの動作・行為・状態によって、主語が目的語に動作・行為或いは変化・作用を及ぼすような表現を、中国語話者は、それを意志他動詞文とまったく同じ表現でする認識を持たない。中国語話者は主語が無意志に動作・行為を行う△文を、I の主語の観点よりもII の目的語の観点をほうに、文の焦点をおく傾向が強い。したがって、B 2. の△文は、中国語話者は

自動詞文か、無意志他動詞文にする傾向が見られる。中国語話者の使用傾向、及びその中国語表現を次のように、挙げておく。

B 2. (意志が入っていない場合)

〔主語＋自動詞〕

〔主語（動作主）＋無意志他動詞＋目的語〕

△しばらく追いかけたが、泥棒をとうとう逃がしてしまった。

→○しばらく追いかけたが、泥棒がとうとう逃げてしまった。

〔追了一會兒、小偷逃了。〕(注 6)

△外を一回りして帰ってきたら、全身から汗を流していた。

→○外を一回りして帰ってきたら、全身から汗がだらだらと流れた。

〔在外頭繞了一圈回來、就汗流浹背。〕

〔在外頭繞了一圈回來、就流了一身的汗。〕(注 7)

△財布を落としたよ。(財布が落ちたのを見て)

→○財布が落ちたよ。

〔錢包掉了。〕

△夜が更けても、子供が帰ってこないので、母親は顔に心配の色を浮かべた。

→○夜が更けても、子供が帰ってこないので、母親は顔に心配の色が浮かんだ。

〔夜深了、小孩子仍舊還沒回來、母親的臉上浮現出焦慮的神情。〕

△山でスキーをされていて足の骨を折った。

→○スキーをして、(転んで)足の骨が折れた。

〔去滑雪、他跌斷了脚。〕(注 8)

2. その他の他動詞文

次に、中国語話者には違和感のないその他のA. B. C. 類動詞の○文、及び、その中国語表現を並べておく。

A. 類動詞：有意文のみに使われる動詞

〔主語（動作主）＋意志他動詞＋目的語〕

○あの母親は息子の無実を信じる。

〔那位母親相信兒子是無辜的。〕

○全国民は神様に平和が再び訪れるように祈った。

〔全國國民向神祈求和平的再度降臨。〕

○次の電車は2分後到着すると駅員さんが教えてくれました。

〔車站站員告訴我、下一班的電車兩分後到。〕

○あの方は先から部屋中眼鏡を捜している。

〔那個人從剛々就在房裏找眼鏡。〕

○母はお客さんにお菓子を勧めた。

〔母親請客人用點心。〕

B. 類動詞：有意文・無意文両方に使われる動詞

B 1. (意志が入っている場合)

〔主語＋意志他動詞＋目的語〕

〔主語（動作主）＋介詞＋目的語＋意志他動詞〕

○バッタを捕まえたが、元気が無くなったので、逃がした。

〔抓到螞蟥、越來越沒生氣了、把它放了。〕

○男の子は手紙を瓶の中に入れて、海に流した。

〔男孩把信放入瓶中、放流到海中。〕

○石鹸を使って、手の汚れを落とす。

〔用肥皂洗去手上的污垢。〕

○あなたのお言葉をたびたび胸に浮かべて頑張っている。

〔常常記起你的話語、努力用功。〕

○子供は色紙を飛行機の形に折っている。

〔小孩子把色紙折成飛機的形狀。〕

C. 類動詞：無意文のみに使われる動詞

〔主語＋無意志他動詞＋目的語〕

〔主語（動作主）＋介詞＋目的語＋無意志他動詞〕

○計算を間違えた。

〔我把計算算錯了。〕

○この新しい計画を喜ばないものはいないだろう。

〔大概沒有人不喜歡這個新計畫。〕

○今朝はいつもより寒さをつよく感じた。

〔今天早上（我）感到特別冷。〕

○ちょっとしたミスで入賞のチャンスを失った。

〔因為一點々の失誤、失去了得獎的機會。〕

○友人との約束を忘れた。

〔忘記了與友人的約定。〕

五. 結論

日本語他動詞文は主語であるものが意志的に、無意志的にかかわらず、目的語であるものに動作・行為を行使するときには他動詞文で表現する。そして、目的語であるものに自ら、動作・行為或いは状態・変化が起こった場合、その目的語が主語であるものとはある種の領属関係、利害関係が存在するには、日本語でも他動詞文が成立する。

日本語に対して、中国語は、動詞の性質によって、意志的に或いは非意志的に目的語に主語である動作主体が動作・行為を行使するときには、それぞれ意志的あるいは非意志的に他動詞文で表現する。しかし、日本語と違って、動詞の性質の違いによって、目的語であるものには、自ら動作・行為・状態・変化が起きた場合、目的語自らの動作・行為・状態・変化であることで、目的語であるものが主語の位置に立つ自動詞文になるか、或いは、主語であるものの無意志他動詞文になる。日本語のように、意志、無意志を問わず、同じような他動詞文で表現することはない。

注

1. 例文の冒頭に付けている○印は中国語話者には違和感が感じられない日本語文。(以下同)
2. 例文の冒頭に付けている△印は中国語話者にはなじまない日本語文。(以下同)
3. 国立国語研究所 宮島達夫 (1972) p422—p475 を参照。
4. ここで挙げた生理現象或いは心理現象の例文はすべて 小泉保・船城道雄・他編 (1989) 『日本語基本動詞用法辞典』 から借用。
5. 目的語に文の観点を置く場合、目的語を主語とする表現の自動詞文のほか、目的語を主語とする受け身文が使われる。
6. 中国語は〔 〕 括弧の中に示される。(以下同)
7. 中国語のこの文は無意志他動詞文で、〔流〕という他動詞は無意志表現に使われる。例えば、〔流汗〕、〔流血〕、〔流涙〕。意志表現にする場合は、〔処置介詞+目的語+無意志動詞〕〔使役介詞+目的語+無意志動詞〕の表現形式で、例えば、〔把汗流出来〕、〔讓血流出来〕、〔讓涙流出来〕。
8. 中国語のこの文は〔自動詞+結果補語+目的語〕という表現形式の無意志自動詞文である。

意志表現にする場合は、〔他動詞＋目的語〕、〔他動詞＋結果補語＋目的語〕の表現形式で、
例えば、〔截肢〕、〔打斷脚〕。

参考文献

国立国語研究所 宮島達夫（1972）『動詞の意味・用法の記述的研究』 秀英出版
p422－p475

日本語教育学会編 小川芳男・林大・他編集（1982）『日本語教育辞典』 大修館
書店

小泉保・船城道雄・他編（1989）『日本語基本動詞用法辞典』 大修館書店

劉月華・潘文娛・他著 片山博美・守屋宏則・平井和之 共訳（1991）『現代中国語
文法総覧(上)(下)』 くろしお出版